第三　施設と學會

一　陳列館

文學部の施設として重要な意義をもつものに陳列館がある。主として史學科關係の資料を蒐藏、陳列しているが、一部は研究室、教室として使用されているため、すでに「學部の歴史」の項でもしばしばこの建物については觸れるところがあつた。若干の重複はやむを得ないが、本項では主としてその蒐藏資料の點から陳列館の歴史的發展の姿を紹介するのに努めたい。

京都大學の創設のときに將來開設される文科大學に陳列館を附置するという考えは時の總長木下博士の構想のうちに含まれていた。從つて明治三十年代に入るゝ關係品の蒐集が始められ、蒐集されたものは附屬圖書館に保管せられた。當時のものとして有名なのは丹波氷上郡雲部車塚古墳出土の一括遺物であるが、これは木下總長の配慮で重要遺品については特に模型まですでに作製せられていた。

明治三十九年いよいよ文科大學が創設され、翌四十年には史學科が開設されたが、右の構想に文科大學の特色を表わすべく、關係の各科の人びとは直ちに活動を開始した。すなわちこの年三浦周行が講師となつて古文書の蒐集に着手したが、また四十一年には濱田耕作が講師となつて考古學資料の蒐集を始め、小川教授もこれと並行して地理學關係の資料を蒐集した。

四十三年の秋、狩野、內藤、小川の三教授、富岡、濱田の二講師はともに敦煌遺書の調査のため淸國に出張したが、小川、濱田兩名の河南、洛陽、滿洲への旅行探査によつて中國に關する資料が新たに蒐藏品に加えられることになつた。大正元年に內藤教授は羽田、富岡の二講師を伴ない奉天の故宮で滿文老檔・五體淸文鑑の寫眞撮影を行なつたが、これらの資料も陳列館の蒐藏のうちに加えられ、學界に多大の恩惠を與えるものとなつた。中國では間もなく辛亥革命が起つたが、その混亂の波を避けて京都に碩學羅振玉氏らが假寓した。羅氏は文科大學の東洋學關係諸教官と親しく交わつたが、この間にあつて內藤教授の配慮により中國關係の分野の蒐集は目立つて多くなり、そのころから始まつた西域探檢の新資料とともに早くもここに他に比を見ない特色を打ち出すようになつた。

一方日本の上古關係の遺物として、丹後久美濱の織田幾次郎氏の蒐集品を一括讓渡され、海外方面についてはエジプト發掘財團に加入して學術的價値ある近東の諸資料を獲得し、考古學の分野では大正の初めにほぼ基礎的な資料を整備した。

ところで、これらの資料は早くから設けられていた古文書室と地理學・美學美術史の兩教室にそれぞれ臨時に分置されていたが、火災の危險もあり、安全な保存措置を講ずることは焦眉の急となつた。そこで時の總長菊池大麓博士は特にこの點に配慮し、種種運動の結果、四十四年度に工事費七萬七千圓を以て圖書館の北側に耐震耐火の建物を建てることを決定した。建築は同年一月に起工され、大正三年三月に工事完了して、その七月に史學科初め美學美術史など關係の深い學科が移り、正面階下の三室は西洋・東洋・日本の考古學古美術關係の陳列室、階上の一室は古文書の收藏室に當てられた。今こそ陳列館は古色蒼然として他の諸建築と比較すると古典的な匂を發散させているが、當時としては劃期的な新建築で、その堂堂たる外觀は無限の價値を藏する內容とともに京洛の人士の目を奪うものであつたのである。

同時にその運營については文科大學の內規として關係教授から成る委員會が結成され、小川教授が委員長となり、

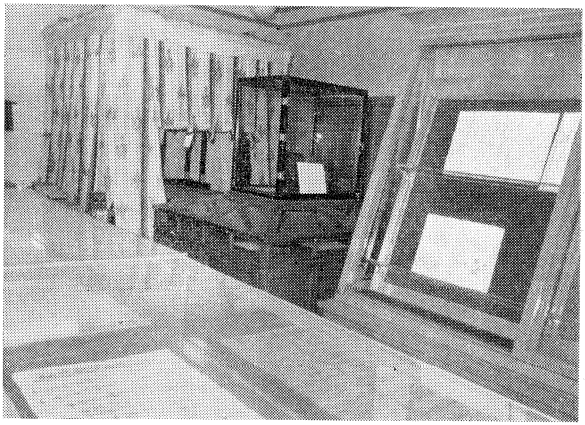
濱田助教授の留學中考古學關係の事務を擔當した今西龍講師が主事で、國史・考古學・地理學の各研究室助手がそれぞれの事務を分擔した。蒐集資料の記錄・整理・保存、研究者のそれらの利用についても規定が設けられ、日本における最も整備されたこの種の研究の中心がここに誕生したのである。

大正四年十一月には大正大皇の卽位式が京都御所で擧行されたが、この機會に陳列館の開館式が行われ、全館を擧げて特別陳列を準備して一般に公開した。翌年一月にはロシアから學術視察團長モギリアンスキー氏が來朝し、本學では特に陳列館を案內したが、この外客は特色あるこれらの施設にすこぶる强い關心を示した。これらのことは國の內外に陳列館の蒐集が注目されるに至る最初の契機であり、その後蒐集品の漸增とともに內外の名士は本學を訪問すれば必ず陳列館を見學することを豫定に入れる程になつたのである。

陳列館は當時は一般に公開するに至らず、またその陳列品においても大學自體の蒐集品だけでは不充分であつたが、主として內藤、小川兩教授の盡力で、東亞に關する資料は京阪神の所藏家の出品なり、羅振玉氏らの寄托品なりが陳列されてその不足を補なつた。明治の末年に濱田講師が學術發掘を行なつた南滿洲の出土品がこれらに一層花をそえるものであつたことはいうまでもない。

大正五年三月に濱田助教授は海外留學から歸つたが、翌六年には日本最初の考古學講座が開かれ、その教授に就任した。日本における考古學は、はじめて學問として新たな出發をしたのであるが、教授は同時に陳列館主事となり、考古學の資料蒐集を積極的に推進することとなつた。日本の政治力の大陸への發展に伴ない、關係教授を通じての東亞の遺物に關する蒐集はその後特に注目すべきものがある。濱田教授、梅原教室員は大正七年以降朝鮮總督府の史跡調査に關係し、多數の遺物遺跡を扱つて朝鮮古代文化の解明に努力した。一方岡崎藤吉氏の好意で小川教授蒐集の多くの中國石佛・土器その他の遺品が陳列館に寄贈された。大正八年羅振玉氏は永年の京都の亡命生活を打ち切つたが、歸國に際して夥しい收藏品を陳列館に寄贈した。同じころ英國エジプト考古學會のペトリー教授の

特別な配慮により、優れた古代エジプトの遺物の寄贈をうけたことや、ボール博士から楔形文字のタブレットの寄贈のあつたことも特筆さるべきことである。文學部では十一年十一月に皇后陛下の行啓のあつたのを機とし、十二月にこれらの蒐集品のうち重要なものを『考古目錄』としてまとめて公刊した。



第一陳列館國史陳列室

考古學の部門のみでなく、國史の部門においても古文書の蒐集はこの間着着と進展した。昭和六年二浦教授は停年退官したが、その際まで集められた古文書の總數は無慮二萬點に近く、その數においては早くから發足していた東京帝國大學史料編纂所のそれに比肩するまでに至つた。その後兩者の間に古文書複本の交換が行われ、根本史料は層充實して研究の中樞としての地位は搖がないものとなつている。

以上の結果として陳列館はようやく狹隘を告げるようになつたが、大正十二年十二月に第二次增築が竣工し、新たに階上に國史陳列室が設けられ、階下には地理學の陳列室が開かれることになつた。

昭和四年にはさらに增築が行われ、同年十二月には中庭のある瀟洒な二階建の建物が完成したが、このときまで正面にあつた考古學關係の三陳列室は新たに設けられた北側階下の部屋とその東側の一室に移つた。階上の東邊には國史の二陳列室、階下に地理學の一陳列室が設けられ、ここに現在見るような部屋の配置が完了したのである。國史科は三浦教授が退官後西田教授が土俗學・民族學的資料の蒐集という新方面を開拓したが、早く大正三、四年に地理學の內田助手が南洋調査の際將來した土俗品と相まつてともに陳列館の新分野がここに形成された。

大止の末期から昭和の初頭にかけては日本の大陸考古學が一段と發展したときであるが、大正の末年には濱田教授などの努力により東亜考古學會が設立され、多方面の活動が行われた。滿州事變後、滿蒙における調査研究は內藤名譽教授、羽田教授によつて多く指導されたが、それらの關係よりして根本的な資料は多數新たに加えられるに至つた。

陳列館考古學第一陳列室

昭和十二年六月永く陳列館の經營に當つた濱田教授は總長の任に就いたが、以後陳列館は西田教授と梅原教授の協力によつて運營された。すでに文學部の活動は頗る多元的となつており、そのため史學關係以外の部門は陳列館から分離して沒交渉の狀態となり、史學科でも特に關係の深い部門のみが、專ら經營に當るという傾向を濃くして來た。特に時局下の影響はその傾向を一層强めたが、このような狀態が必ずしも好ましいものではなく、文學部全體の關心と支持がやはり依然として必要な基本的條件であることはいうまでもない。

太平洋戰爭の苛烈化は當然陳列館蒐藏品の疎開という問題を生んだがこの難局に當つて梅原教授の拂つた努力はなみなみならぬものがあつた。幸いにして陳列館は戰災を受けずに終り、その後の混亂期にも散亡するものはなく、安全に保存されて今日に至つたのは同慶の至りといわなければならぬ。

さてこれらの蒐集品の整理と研究は絶えず行われているのであるが、陳列館は單にそれらを蒐藏するのみでなく重要なものは版に付して廣く學界に紹介している。考古學の部門では前述のごとく大正十一年十二月に『京都大學

文學部考古圖錄』を出版し、ついで昭和三年十一月には英文を加えた再版を發行、さらに同五年三月にはその後の新資料をも追加して第三版を刊行している。この間大正十三年八月には濱田博士が『支那古明器泥象圖說』を書肆から出版したが、これは陳列館所藏の泥象類を色彩圖版などを副えて紹介したものである。この書は好評を博して昭和二年三月にも增補版を發行している。國史關係史料については昭和の大典を記念し、所藏品のうち特に重要と思われるものを拔萃して、昭和八年三月『京都帝國大學國史研究室藏史料集』第一册を公刊した。

敗戰後の混亂期において陳列館としての大きな變化は國史關係の史料の蒐集の中絶したことである。しかし考古學關係では日本上代史への關心の高まりから內地における遺跡の調査は盛んになり、考古學研究室は當然その指導的な立場をとつたから、各地の重要な發掘に關係して、それらの資料はほとんど陳列館に齎らされた。そのうち終戰前後における伊賀名張廢寺跡の調査關係資料、昭和二十二年における攝津紫金山古墳出土品、その前後における近江滋賀里史前遺跡の出土品のごときは特に注目すべきものであるが、二十六年三月刊行の『京都大學文學部考古圖錄新輯』は、これらの資料を廣く學界に紹介するために編纂されたものである。

陳列館の實質的な活動は以上のとおりであるが、その制度的な面においては先にも述べたように若干の問題がすでに起つていた。講座單位の發達はこの種の綜合的な陳列館の運營に必ずしも好影響を與えず、その本來の機能が十分に發揮されない結果を齎らしたのである。昭和二十七年以降考古學講座に對しては特別の豫算配當がなされることになつたが、それは文部省がその豐富な標本類の維持に對して特別の關心をもつようになつたからである。昭和二十九年八月に學部長となつた高田教授は、陳列館本來の目的とその蒐集された資料の重要性に鑑み、その正しい運營について教授會の注意を喚起した。その結果教授會は新しい陳列館の運營について當初の機構を再確認し、文學部陳列館としての再出發を考慮し、運營委員七名、研究員・事務擔當員を若干名おき、二十年七月梅原教授を主事に任じた。折から附屬圖書館書庫の一部が文學部に貸與されることになつたので、ここにも收藏品の一部を移

し、未整理資料の整頓を一層推進した。一方陳列館を全く新たな建物として再建することも考えられ、すでにその設計圖も一應でき上つている。近年各大學からの參觀者および海外からの見學者は以前にも増して多いが、三十年十二月二十八日文部省は告示第一〇八號を以て陳列館を博物館に相當する施設として指定した。

三十一年八月には梅原教授が退官し、主事は小葉田教授の任ずるところとなつた。陳列館は今後ますますその收藏品の多きを加え、學界に多大の貢獻をなすことが期待されているが、これほどの規模を有する施設が他の大學にないことを考えると、これは單に文學部のみでなく本學全體にとつても誇りとするに足るものであろう。

二　圖　書　室

文學部の學問にとつて圖書の持つ意味は他とは相當異なつて重要なもので、圖書の整備の如何は直ちに研究あるいは教育に直接影響するものであることはいうまでもない。その故に本學部は創設以來できるだけその充實に力を盡してきた。圖書室の施設は制度上は陳列館とはまた性質を異にするが、その重要性に鑑みて特に一項を設けてその內容を紹介することとする。勿論說くところは文學部に如何なる圖書が如何に整備され、如何に利用されているかであつて單なる制度的な記述でないことは豫め諒承を得たいと思う。

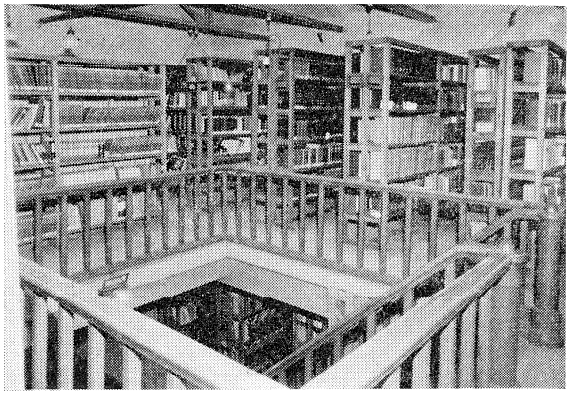
明治三十九年九月に文科大學は開設されたが、それに先だつて附屬圖書館長島文治郎助教授により、將來の文科大學に必要と思われる圖書が蒐集されていたことは「學部の歷史」に述べた。開設と同時に圖書は研究室に備えつけ、學生に自由に出入せしめて研究の便を與えたが、附屬圖書館に圖書を集中させずに各學部圖書室乃至は研究室にこれを分散配置する方針がここにはじめて確立した。圖書の集中と分散は一長一短でいずれが優つているともい

えないが、研究に從事する立場からすれば分散の方が便利であることはいうまでもない。

最初のころの文科大學の圖書狀況を見ると、西洋哲學および倫理學が一室に同居し、前者には知識哲學・自然哲學・その他近代哲學に關するものが屬し、古代・中世の哲學書も若干含まれていた。後者には一般問題、特殊研究の書を時代・國土に從つて分類し、十六、七世紀の古書數十部を苦心蒐集し祕藏した。教育學・社會學も一室にまとまつていたが、前者は一般圖書を網羅し、谷本教授の藏書とともに研究に便利にし、後者は一般圖書のほか社會心理・社會進化に關するものを多く藏していた。また西洋文學と美學美術史が一室にあり歐米の文藝關係の圖書、美術考古學上の遺品および模型が置かれて專門研究者のみならず藝術愛好家に魅力ある存在となつていた。印度哲學・宗教學および梵文學もまた一室となりインドの古典・佛教史の史料、歐米學者の研究文獻などを整備していた。階上の西洋史研究室は各國別に學者の著書を集め、東洋史・支那哲學および支那文學はやはり一室にまとまつて圖書標本類を置いていた。國史のみは數室をもつて研究資料として古記錄のほか特に古文書の蒐集に努力し、史學理論・社會諸科學の圖書をも集めて新しい國史學の研究方向を示していた。國語學國文學・言語學は一室にあり、前者には古代、中世文學の註釋書を集め、古書の數十種を藏して特殊研究に備えた。地理學研究室のみは法科大學第八教室の一部に分離して存在していた。梵語學梵文學には明治四十三年榊助教授が歸朝し、ネパール一切經その他の貴重資料が齎らされている。

文學科閲覽室

大正三年三月史學科陳列館が完工し、史學科の各研究室および美學美



哲學科書庫

術史研究室などがこれに移つたが、その建物の西側には書庫が設けられ、ここに各研究室の圖書を併置することにした。別に閲覧室も設備されて從來午後四時に閉室されたのを夜九時まで延長開室し、學生の研究に多大の便宜を與えた。引き續いて從來の各研究室の小區分をやめ、哲學では心理學を除いてこれを二分し、一方を哲學・倫理學・教育學・社會學・美學・宗教學とし、他方を印度哲學・梵語學に分ち、文學科では一方を西洋文學、他を國語學・國文學・支那語學・支那文學とし、これに支那哲學を加えて圖書を整置した。

大正十二年十二月には現在の本館の西側の一廓が竣工したが、その南隅に書庫四階と閲覧室が新設され、哲學科・文學科の圖書全部を移し、階上を哲學科、階下を文學科の閲覧室とした。從來の研究室規則は改められ、新たに圖書室規則と圖書室細則が制定された。十四年には西北隅に書庫が新造せられ、文學科の圖書および閲覧室がこれに移り、十一年十月には南邊の增築が完成したので整理・事務を司る圖書室は現在の位置へ移つた。文學科の圖書はその後も膨脹をつづけ、この書庫のみでは收容しきれず、ついにその南隣の階上、階下の二室を併せ、クラーク文庫・イタリア語學文學・西洋古典語學文學および支那學の一部を收容するに至つた。

文學部の藏書の種類は一般圖書・雜誌・辭書・參考書・貴重書、および特殊圖書など種種あるが、數量に至つては昭和三十一年五月一日現在では左記の通りで、半世紀の間絶え間なく蓄積された文獻の豐富さを遺憾なく示している。

和漢書　圖書　二四一、七三二冊
　　雜誌　一、五八四冊
洋　書　圖書　一二三、七四〇冊
　　雜誌　一、二〇八冊

これらの圖書は大體において購入によつて整備されたものであるが、中にかなりの量がまとまつた文庫として購入または寄贈されているので、そのいちいちについてつぎに簡單な說明を加えよう。

一、內田文庫　國史關係中心の和書　約三、六五〇冊　大正十四年九月收藏

本學國史研究室の創設者である內田銀藏博士の藏書で、博士の逝去後、夫人イト女史から寄贈された。單に國史關係の文獻のみならず政治・經濟・社會の諸學のものを含み、洋書・漢籍もあり、博士の學識の廣さを今になお物語るものである。

二、桑原文庫　東洋史關係圖書　二、四五七冊　昭和七年六月收藏

本學東洋史講座の擔當者であつた桑原隲藏博士の藏書を、博士の逝去後嗣子武夫氏が一括寄贈されたもの。漢籍を中心としてこれに和書を加えているが、基本的なものを四部にわたつて網羅している。洋書は博士の專門が東西交涉史であつたため、その數は多く、特にイスラム關係の文獻など重要なものが含まれている。この洋書の豐富なことは東洋史研究室の中東・近東研究の推進に與つて力あるものである。

三、池田文庫　ロシア文圖書　二、一五九冊　昭和八年七月收藏

池田孫七氏が令息の本學部在學中に歿せられたのを記念し、言語學研究室へ寄贈されたもので、語學・文學社會學・藝術など廣範圍にわたるロシア語文獻である。

四、クラーク文庫　英文學關係圖書　五、一三三冊　昭和十年三月收藏

かつて本學部英文學の教師であつたクラーク氏 Edward B. Clarke の藏書であるが、昭和九年三月同氏の歿後ジェシー夫人 Jessie Clarke によつて英文學研究室に寄贈された。內容は英文學全般にわたる作品および研究書である。

五、木村孝一記念圖書　社會學關係圖書　五〇二冊　昭和十二年一月收藏

昭和五年本學部社會學專攻を卒業した木村氏の歿後母堂夏子女史より寄贈せられたもの。部數は多くないが研究に必要な基本的文獻がそろつているため學生の閲覽借出が多い。

六、尾崎文庫　インド・ジャワ文化關係圖書　一二四冊　昭和二十年十一月收藏

本學經濟學部の卒業生で三井物產社員であつた尾崎良博氏が生前インド・ジャワ方面に在留していたとき蒐集した獨・英・蘭および日本の諸語で書かれた文獻から成る。文化一般および考古學的研究が多く含まれ、氏の歿後遺族甫氏から考古學研究室に寄贈された。

七、米田文庫　社會學を中心とした圖書　三、一五〇冊　昭和二十一年四月收藏

かつて本學部社會學教授であつた米田庄太郎博士の所藏圖書で、さきに民族研究所が購入したものであるが、研究所の廢止とともに本學部に移管された。博士はわが國で最も早く理論社會學に專念した人であり、本文庫には十九世紀から二十世紀にかけて現在では入手し得ない歐米の著名な理論社會學者の研究が多く收められている。

八、田中文庫　西洋古典學關係圖書　一、八七五冊　昭和二十二年二月收藏

本學部西洋古典語學文學研究室の創設者である田中秀央博士の舊藏であるが、博士の退官に際し、淺野長武氏の好意で寄贈せられたもの。ギリシア語・ラテン語の原典・文典・辭書・研究文獻などが一括されている。

九、潁原文庫　國文學關係圖書　五、四四七冊　昭和二十四年二月—二十五年十月收藏

本學國文學教授であつた頴原退藏博士の藏書で、博士の逝去後遺族から購入された。この文庫は近世日本文學全般にわたつて蒐集されているが、博士が俳諧史の權威であつた關係上、俳書の板本・寫本が數多く含まれている。

十、岡嶋文庫　古代東方關係圖書　二三三冊　昭和二十六年三月收藏

奈良女子高等師範學校教授で本學講師でもあつた岡嶋誠太郎氏の藏書で、氏の歿後篤子夫人から寄託されていたものを後に購入した。氏がエジプト史專門であつたため、エジプト學の專門雜誌などバックナンバーが揃つており、オリエント研究に絶大な價値を持つている。

十一、朝永文庫　哲學關係圖書　六六二冊　昭和二十七年三月收藏

本學西洋哲學史講座の擔當者であつた朝永三十郎博士の藏書で遺族から購入されたが、內容は哲學關係の洋書がほとんどである。

十二、西田文庫　哲學關係圖書　一、二六七冊　昭和二十八年三月收藏

本學哲學講座の擔當者であつた西田幾多郎博士の藏書で遺族から購入されたが、ほとんど哲學全般にわたる洋書である。

十三、金倉文庫　イタリー政治史關係圖書　四二八冊　昭和二十八年七月收藏

イタリー獨立運動の歷史を專門とした金倉英一氏の藏書で、氏から購入したが、大部分イタリー語の文獻である。

これら以外にも、戰時中に設置された日本精神史講座所屬の圖書一〇六〇冊、南方文化研究會のもの九一〇冊が別置されているが、民族研究所關係の圖書六四四〇冊も現在では社會學研究室に移されている。また大賀壽吉氏の所藏であつたダンテ關係文獻約三千冊を網羅する旭江文庫は一部分寄託され、大部分は寄贈せられたが、寄託の分

は戰後本學部で購入した。しかしこれは現在は全部附屬圖書館の方に分置されて別扱いをうけている。

なお二十八年十二月には本學名譽教授鈴木虎雄氏の藏書七三九二册が購入され、三十年二月には今西春秋氏の和漢書三九五〇册、洋書二〇册が購入されている。鈴木博士はかつて本學で支那語學支那文學講座を擔當した關係上その圖書には文學關係の漢籍が多く含まれ、後者は朝鮮史學の大家であつた今西龍博士の舊藏であるが、この度の藏書の內容はほとんどが中國關係の書籍である。この兩者はともに文庫としては部數も多く內容も豐富であるが、別置せず文學部の一般の圖書のうちに分散配置される豫定である。

最後に本學部圖書室の特色について述べよう。哲史文の三學科にそれぞれ書庫・閱覽室が設けられていることはすでに述べたが、圖書の分類については各研究室ごとに大別し、さらに種類によつて細分されている。ただし漢籍のみは四庫全書の分類に從い、史部のみは東洋史研究室に屬している。このような分類は一見檢索に不便なように見えるが、それを補なうために本學部では他大學に見られない方法がとられている。すなわち本學部の教官・學生は同樣に書庫內に入つて圖書を檢索することができ、自由に帶出して閱覽票に書き込めば閱覽ができることである。ただ昭和二十四年から二十五年十二月にかけて哲學科書庫などで圖書の盜難が頻頻と起り、それが計畫的な惡質行爲であることが判明したため、ついに二十六年二月から翌年二月まで學生に對しては書庫出入を禁止した。しかし二十七年二月以降は檢索票を作り、教官の許可を得て午後の一定時間のみ入庫を許可することとしたが、依然として所謂接架開放式であることは變りない。これは文科大學時代の研究室圖書閱覽の精神を受けついだもので、特に學生についてこのような方法が考えられていることは、その研究の上に非常な便宜を與えるものである。

本學部の藏書數は恐らく全國大學のそれと比較して第一等に位するものと思われるが、その點では本學部は他に大いに誇つてよいかも知れぬ。しかし雜誌などのバックナンバーが戰爭によつて缺けているところが若干あり、その補充に現今は相當苦心している。豫算の關係もあつていまでは雜誌などは戰前程の種類を購買しかねる實情では

あるが、種種の努力を重ねて歩一歩解決へと進みつつあるのが現在の實情である。

三　學　會

大學が設立されると、それに關聯して學會が創設されるのは當然のことであるが、わが文科大學も設立の翌年明治四十年二月には早くも教育學會が成立し、以後續續と專攻分野にわたる學會が創立された。これら諸學會は教室における補助的な意味も含み、又個個の研究の發展に刺激を與えるという意味で重要な存在であるが、そのいちいちについては「講座の沿革」のうちに含めてあるのでここでは詳細に述べるのは避けたい。ただ文科大學全體の學會ならびに哲・史・文三學科の綜合的學會は他に觸れる機會がないので、ここにまとめて記述しよう。

京都文學會

文科大學の代表的な學會は京都文學會である。文科大學を中心とし、機關雜誌を發行することは創設の三十九年九月枳殼邸に催された第一回學友會大會の席上ですでに會合者の間に話題に上つていた。翌年には史學科、翌翌年には文學科がおかれ、海外留學の教官たちも漸次歸朝したので、四十三年二月に桑木教授、上田教授などの主唱のもとに京都文學會が組織せられた。その目的とするところは哲學・史學・文學研究の進歩およびその普及をはかることであり、そのために雜誌『藝文』が創刊されることになつたのである。

藝文の第一號は四十三年四月に發行された。文學會の組織は文科大學教授全員が評議員となり、さらにそのうち

から、各科教授一名を編纂主任とし、別に會計主任一名を定め、ほかに各科關係者より編纂委員および庶務委員を囑託した。當初は桑木、桑原、上田三教授が編纂主任であり、小川教授は會計の事務を掌つた。

藝文の名は漢書藝文志からとつたもので、その撰定の意味は廣く時代の文化を表わすという考えがあつたという。當時の教授は年齢なお若く學界および文藝界を指導するの意氣軒昂たるものがあり、從つてその内容は多方面で單に狹い專門分野の研究を發表するという風なものではなかつた。表紙なども初年度は鼠藍紙に筆太く誌名を表わしており、第二年度からは藤島武二畫伯の嶄新な裝幀を用い、毎卷デザインを改め第四年度に至つている。第五年度からは黑い方形に白く藝文の二字を拔いたものを上段においたが、この意匠が終刊まで繼續して用いられている。

藝文は大正時代に入つてひきつづき各分野の研究成果を掲載して文科大學の學風を代表するものとなつた。しかし一方大正三年十一月には哲學科を中心に京都哲學會の創立があり、他方早く史學科開設と同時に史學研究會があつて相並んでそれぞれ機關雜誌を發行することになつた。このために藝文の持つ綜合的色彩は漸く失なわれがちとなつてきたが、なお特別な學會の結成の遲れた文學科はこの雜誌に據つてその存在を示していた。

大正八年には會の組織は庶務委員を廢して各科一名ずつすなわち植田、那波、井手三氏の編纂委員の手で編輯が行われることになり、この間もと東京の鷄聲堂の手で全國的に頒布されたのも、七年の第九卷からは京都の肇文社に變えられた。編纂委員も後には那波利貞氏一人となり、新村教授の監督のもとに續けられることになつた。從つて所掲の論文はいよいよ文學の關係のものが多くなり、それに史學關係の論文がときたま掲載されるという有樣で、本來とは全く趣を異にする雜誌に變化した。もつとも大正時代の後半には、『ダンテ六百年記念號』(十二卷九・十號、大正十年九月)『ボッカチオ五百五十年記念號』(十六卷八・九號、大正十四年八月)を刊行しているが、これは當初の意圖をよく承けたものというべきであろう。

しかし大正の末年には『支那學』『歴史と地理』『地球』『國語國文の研究』の刊行が始められ、それらは直接研究室の機關誌ではないにしても、半ばそれを背景としていただけに、藝文に與えた影響は些少ではなかつた。ついに昭和六年五月藝文は創刊以來二十二年をもつて終刊となり、その總目索引を發行、文學會も從つて自ら消滅するに至つた。

思うに學の進展が各專門に分化し、研究がますます緻密になるのは趨勢としては止むを得ないが、草創期にあつて綜合的な機關誌の果す役割もまた無視できないものがある。京都文學會および藝文の消滅はとりもなおさず文科大學の發展を表わしているもので、藝文は文科大學のその後の學問の母胎となり、その意味では正に發展的解消を遂げたのである。終刊號は當時の鈴木虎雄教授の次の題詞を掲げているが、その言葉はよくこの間の事情を物語つて餘すところないものである。

藝文叢誌　累刊廿年　其在學界　華實共傳　人物代謝　時運變遷　諸科分岐　獨立精專
堂構肯架　基礎居先　子長親老　順序宜然　茫茫大野　黄鵠聯翩　齊鼓其翼　一擧沖天

京都哲學會

本會は大正三年十一月に、當時哲學科の内部にあつた哲學・倫理學研究會、社會學會、心理研究會、教育研究會美學會、印度・宗教學會が協力して創立され、そのとき毎月一回の例會、年三度の大會を開くことに定められた。續いて大正五年春には會の組織を更に擴張し、併せて機關誌『哲學研究』を發刊することになつた。すなわち明治三十九年九月哲學科開設以來、當時はすでにほぼ十年を閲し、各講座の整備も成り、研究活動は次第に活潑となつていた。しかしこれに比例して『哲學雜誌』『丁酉倫理』『藝文』等の從來の發表機關は漸增する卒業生に對しまた

は活潑化せる教官の發表に對して狹隘であることがおいおい感ぜられて來ていた。そこにはなんら特殊な主義や志向に基くことのない、謙遜な「手習草紙」的な機關誌への要求があるだけで、純粋に學究的志向の中から『哲學研究』は自然發生的に出發したのである。かくして大正五年二月二十七日、京都哲學會發會式公開講演會が開催された。記錄によれば、高田保馬、小西重直、松本文三郎三氏の講演が法科大學大講堂で行われ四百餘名の來會を見たという。このとき以來會の事業として毎月例會を、年二回大會を開催し、月刊機關誌『哲學研究』を發刊することが定められ、斯學に關心を有する人びとが多數入會した。續いて同年四月には早くも『哲學研究』第一號が會員に配布せられたが、同號には西田幾多郎「現代の哲學」千葉胤成「精神物理的法則」松本文三郎「佛像の美術史的研究」小西重直「社會的教育學の過去及將來」中川得立「ベルナルド・ボルツァーノ」などが掲載されている。

哲學會諸事業のうち、例會は間もなく行われなくなり、また春秋二回の大會は昭和二年からは年一回の開催に變更せられ今日に及んでいるが、この大會は常に碩學新進の深遠該博なる發表が行われて學界に貢獻している。また『哲學研究』は創刊以來月刊哲學專門誌たる立前を堅持して日本の哲學界に確固たる地位を築き、現在では卷數三十八卷、號數四百四十六號に及んでいる。敗戰前後の混亂期にあつては諸般の外的事情により約一年間の休刊を見たが、現在は諸外國にもほとんどその類例を見ない月刊という體制をほぼ回復するに至つた。發表せられる論說にも學界へのすぐれた寄與となるべきもの多く、四十餘年の歷史を通じて常に斯學研究者の一指針となつている。

つぎに哲學會の學的活動を『哲學研究』誌を中心として考えてみたい。「哲學研究」四十年の歷史を貫いているのはかの創設の精神、すなわち學閥・學歷に拘泥することなく天下に廣く人材を求めた雄大なる氣宇であり、自由なる創造の精神である。從つてそれはいかなる時機にも、限定された立場に立つことなく、況んやジャーナリズムに訴えて虛名を天下に流布することはなかつた。それは「燎爛たる分裂の學派」として、「決して固定した一つのものでなく、輝く光芒を引いている巨大な一つの流るる星」である。かくしてその最初の隆盛は、西田、深田、朝

永、波多野、藤井、小西、松本、天野、田邊、和辻、山内、植田、小島、九鬼の諸教授の輩出した一九一五—四五年の時期によつて示される。この時期に京都哲學會の活動は次第に本邦の學會に重きをなし、上記諸教官の雄篇が相繼いで本誌に發表せられた。就中、西田、田邊兩博士の精進および研究は壓倒的推進力として作用し、會員および一般の間に熱心なる傾倒と支持とを得、その盛名を慕つて笈を負い入洛する若き哲學徒が相繼いだ。

しかし「哲學研究」が一定の傾向、特殊なる語法や論調によつてのみ支配されたというのでは決してない。客觀的に見れば、ジャーナリズムに對してもまた相互にも何等關連のない三篇の論文を掲載せる雜誌が超然として、毎月會員にまた一般に配布せられていつたに過ぎない。それが期せずして合目的的に京都哲學會の隆盛に寄與したのであつて、その根底には「重荷を負うて峻坂を登る駑馬」（朝永教授の言）に、あるいは「一切の支脈を割愛する一筋の鑛夫」（西田教授の言）に自らを喩え、儒夫をして立たしめる精進に邁進した歴代諸教官の努力があつたのである。かの創設の創造的普遍的精神に淵源する、かような嚴肅な切磋琢磨の學問的精進が京都哲學會の傳統となり、地下水のごとく土壤の深底を潤してその未來を培つたのである。

祖國の敗戰は反省を齎らし、現實の基礎づけへの挫折は深い自己批判に導いた。かくして戰後は體系的志向に代つて、着實にして手堅いエレメンタリーな研究が出發點となつた。しかしそれは單に自信の喪失とか挫折した青年時代の客氣とかいうものではない。それは何處までも獨斷を排除し徹底的な自己批判を行なうこと、すなわちフィロソフィアの精神の、從つて京都哲學會の傳統の發露にほかならぬ。すでに深く培われた傳統は漸次新しい成果を結びつつあり、われわれは第二の隆盛期を近い將來に期待できるのではなかろうか。

京都哲學會および『哲學研究』はどこまでも純粹な學問的研究の發表團體として着實に進みつつあるが、特に最近は質的向上への努力に併せて外國文要約や新着外國雜誌所載論文一覽の掲載、さらには外人講師の論文飜譯をも隨時行なつて、外國學會との接觸を求めつつ內容・規模の擴大を意圖している。

史學研究會

この會は明治四十年五月文科大學に史學科が開設を見て間もない同四十一年の二月に廣く史學の研究を進めるために設けられたものである。當初の會務は增澤淑氏がこれに當り、當時の史學科の諸教官が指導の位置に立つて東京大學の雜誌に對して新たな學問の中心をここに起すことを期したものである。すなわち會は六十餘名の會員を以て四十一年二月十一日文科大學第八番教室における例會講演會および學內尊攘堂に史料參考品の展觀を開いたのに始まる。その席上內田教授が闡明した會の運營についての方針に從い、越えて三月十二日に醍醐三宝院・日野法界寺・宇治平等院などをつぎつぎに見學、專門家の實地研究を聽くという特色のある發足をなした。

當初の評議員は內藤虎次郎、中山再次郎、內田銀藏、三浦周行、坂口昂の五氏であり、幹事は中村善太郎、谷井濟一、增澤長吉の諸氏であつて、一方會の事業としてはその講演會の講演を補訂の上出版することであつた。かくして出刊されたのが四十一年九月に『史學研究會講演集』第一册で、その內容は異色ある研究に滿ちている。四十一年六月七日に行われた第三回講演會には那珂博士追悼記念の陳列を行ない、四十二年九月に講演集の第二册が刊行された。四十二年十一月二十八日の總會で評議員が增員されて十名となり、會務主任として內田教授がその任に當り史學科の諸教官と、ほかに新村教授、中山再次郎氏が評議員となつて會の基礎が確立された。その後講演集は、四十三年七月に第三册、四十五年四月に同じく第四册を刊行し、大正三年九月には『史的研究』、大正五年二月には『續史的研究』を發行した。

大正三年に入つて會務の發展に伴ない、新たに同年六月と十一月に會報を刊行して、會員相互の連絡をはかることになつた。しかしてついに大正四年五月二十二日、第三十四例會後の臨時總會で會則の改正が行われ、增田氏が

辭任して植村清之助氏がこれに代り、全部大學で運營することに改められ、また翌五年十一月を期して季刊雜誌『史林』を宝文館から刊行することとなつた。この雜誌は三浦教授が主任となり、各科の教官が責任を以てその編輯に當つたが、教授はその退官の昭和六年六月に至るまで、終始この位置にあつてよくその特色を發揮した。當時の會員は百十名ほどであつたが、この雜誌の發刊以後、會は全國的な規模に發展することになつたのである。

大正七年十一月九日開催の總會から新たに東京帝國大學の史學會と講師交換を行なうこととなり、最初の出講者として坪井九馬三博士が入洛、「毛皮國本の國家」の題で講演した。史林の編纂における一つの特色としては關係者の研究論文のほか、まず毎年前年度の史學地理學界の綜觀をなしたこと、第二卷に今西博士の「朝鮮史の栞」、第三卷に「考古學の栞」、第五卷以後に天沼博士の「日本建築研究の栞」を連載したことである。天沼博士のものは第十六卷まで連續掲載せられたが、第六卷からは牧健二氏の「歐米人の書ける日本史の栞」も收載されている。

史林の定期出版のほか、昭和の初年には總會における講演に因んで天正年間遣歐使節關係文書（新村、濱田兩教授編）、大館持房行狀（三浦教授編）の特別出版なども行われた。

昭和の初期に入つて會はなお順調な發展をつづけ、漸次斯界に重きをなしたが、昭和十年十一月には雜誌が二十卷に達したのを機會に、從來の刊行物を網羅した（但し會報二冊が除かれている）詳しい『總目索引』を公刊した。時代の變遷に伴ない、昭和十三年十一月十六日の評議員會においては會の運營の實狀を檢討の上、會則を變更、名實ともに京都帝國大學文學部史學科の研究機關として教官がそのあらゆる會務責任に仕ずることが議決された。越えて十一月二十日開催の大會にはこの重要な會則の改正が可決せられ、當時の史學科の現任教官のほかに多年會務に關與しかつ本學の教授の職にあつた小川、矢野、新村、羽田の諸氏を加えた評議員會を結成し、新たな發足をなすことになつた。これによつて雜誌の編輯には時野谷、中村、小牧の三教官が當り、また委員としては各教室から一名ずつが選ばれ、梅原評議員は庶務會計を擔任することになつた。この新たな體制のもとに、會は雜誌の

發刊とともに各科の分派に伴なう面の補足を目的とした。すなわち文學・哲學科の教授による史學科の學生を對象とした講演を行なうこと、當初に返つて社寺の臨地講演を行事の一つにすることであつた。

かくしてこの體制のまま太平洋戰爭に移つたが、雜誌の定期刊行はもとより會の運營は絶え間なく續けられた。しかしついに時局の影響に伴なう企業整理により、從來出版の事に當つた內外出版會社は印刷部のみ存置し、出版事業は中止のやむなきに至つた。このため會は直接史林の經營を行わなければならなくなり、星野敬一氏が新たに庶務係としてその事に當ることになつた。終戰を中にした前後の混亂期にあつても、季刊である雜誌の發行はほとんど遲れることなく遂行されて、昭和二十二年度には第三十二卷に到達したのである。

終戰後それまでの史學科の教官による運營については、當初のような會の運營をより廣汎にして行なうべきであるとの議が出て、二十三年度の臨時總會で再び當初の組織に基く委員の選出と理事會による會務の運營が決定された。かくして原教授を新たに理事長として再出發がなされ、第三十三卷が續刊されることになつたが、秋田屋によつてはじめられた雜誌の刊行は二年間を費して僅かに二册に終り、教育タイムス社の手に移つてからも遲刊を重ねるという困難に直面した。ようやく二十五年度に入つて隔月刊に對する希望が持たれるに至り、その編輯にも企畫性を加え、別に『人類文化史大系』の刊行をも試みられたが、これは僅かに一册を印刷したのみでついに再び會は運營の困難に直面した。この難局打開のために會は自己經營の立場を再びとり、その後史學各科を總括した立場を持して雜誌の編纂にもその方針を具體化するようにし、實質的には史學科の學會として昭和二十九年から隔月刊を實現した。新たに總會のほかに各科の總合による秋季の研究會も行われているが、現在では會員數は千名を超え、その分布は全國各地にわたつている。近い將來における會の課題は如何にしてこれを全國的なものとしてさらに發展させてゆくかにあると思われるのである。

支那學會

この會は明治四十年十月に創立された。支那哲學史・東洋史・支那語學支那文學三學科に屬する教官・學生および學外同好の士を會員とし、ひろく東洋學の研究を目的とする。しかし今日までの間何らの規約を設けず、同好者の全く自由な會合となつているところにこの會の變つた特色がある。毎月一回例會を開き、初期においては、例えば明治四十四年十月、東京大學星野恒教授の「六書に就いて」のごとく學外の學者の講演を聞いたこともある。大正三年ごろから、毎年一回公開講演會を催し、その第一回（十一月）には、清原家舊藏の經書・唐代政書および近衞公爵家藏大唐六典板木などが展觀された。昭和十一年十一月に刊行された『支那學會三十周年紀念册』によれば、三十年間におよそ百六十回以上の例會と二十七回の講演會が開かれている。そのなかで特に異色あるものは大正八年四月二十二日における中華民國南京高等師範學校（のちの東南大學・中央大學）旅行團の歡迎會、昭和二年五月十四日の北京大學教授胡適氏の歡迎會、昭和三年十月二十一日の崑曲名優韓世昌氏歡迎會、昭和八年十月十四日の支那劇レコード演奏會などである。殊に胡適氏の場合は「支那學研究法」と題する講演が行われ、支那劇レコードの演奏は早く大正五年一二月にも富岡謙藏講師の解説によつて催されており、これはちようど第二回目に當る。

例會および公開講演會における研究發表はシナ學および東洋學の全領域にわたる各種の部門をふくみ、中國哲學、東洋史學、中國語學・文學のほか、中國語以外の言語、地理、天文學、日本文學と中國文學の交渉その他、多岐にわたるため、いちいち記すことはできない。この學會において發表された研究がシナ學および東洋學の研究者に大きな刺激をあたえたことはいうまでもなく、雜誌『支那學』（大正九年九月創刊）は、はじめこの學會における講

演および研究發表を記錄し、ひろく一般の人びとに公表するために印刷されたものである。

以上のごとく、本會は久しくわが國における東洋學の最高水準を示すものとして、內外の學者から注目されていたが、研究領域が分化するにつれ、昭和初年から學內に「東洋史研究會」・「支那哲學史研究室會」・「中國語學研究會」・「中國文學會」が相ついで結成され、各研究室を中心とする獨立の團體が生れるに及んで、本會は次第に例會を開くことも稀となつた。しかしなお總合學會としての機能を失なつたのではなく、昭和二十六年十二月、舊子爵舟橋家（清原家の裔孫）藏書が本學圖書館に寄贈された際のごとき、史學科の宮崎市定教授、文學科の吉川幸次郎教授のほか、法學部の猪熊兼繁教授を招いて記念講演と展觀とを行なつた。第二次大戰後の混亂の時期が過ぎ去つた今日、總合學會としての本會が再び往年の盛時を實現することは期待されてよいと思う。